

受賞作 仙石知子氏『毛宗崗批評『三国志演義』の研究』（汲古書院、2017年）

#### 受賞理由

本著作は、毛宗崗本『三国志演義』の思想的特徴を明らかにするため、その表現技法と描かれた時代風潮を検討したものである。

毛宗崗本の特徴を解明するために、第一に、本著作は、毛宗崗本が種本とした李卓吾本からの書き換えと共に、毛宗崗本の評に注目するという方法論を取った。評を毛宗崗本を構成する重要な一要素と考え、それを分析することにより毛宗崗本の文学性を考えようとしたのである。第二に、本著作は、毛宗崗本『三国志演義』の時代風潮の中心にある儒教、具体的には朱子学の存在を指摘するだけではなく、関帝信仰や善書など道教の存在に留意した。しかも、そうした思想性を持つことは、当該時代の人々が文学作品を読むに当たって、いかなる意味を持つのかを考えようとした。それは、『演義』の諸版本の中で、最もよく読まれた通行本である毛宗崗本の中に、その時代の風潮がより明確に描かれているのではないか、という問題意識に基づいている。

毛宗崗本の表現技法における第一の特徴は、人物像に一貫性を持たせることにある。毛宗崗本は、主役である劉備を「仁」の人と描いて物語の中心に置き、聖人君子とすることで、対照的に描かれる「奸」絶曹操を際立たせると共に、「義」絶関羽・「智」絶諸葛亮の活躍を描く。こうした役割分担は、すでに嘉靖本から見られる『演義』の基本的な構図であった。しかし、毛宗崗本が種本とした李卓吾本は、その場面ごとの理解を先行させるために、そうした構図が一貫して描かれているとは言えない。もちろん、李卓吾本にも「寛」と「猛」の対比により、劉備と諸葛亮を比較し、劉備の遺言を牽制と解釈するような、的確で興味深い指摘は見られる。それでも、その場に応じた解釈は、物語の全体像を歪める。李卓吾本は、物語の主人公である劉備ですら、一貫して仁の人として描くことができていない。もちろん、文学としてそれが魅力の場合もある。人間は矛盾に満ちた存在であり、すべてにおいて常に善、あるいは悪である人は多くないからである。しかし、毛宗崗本は、「三絶」それぞれに役割を定め、物語を展開する主人公である劉備を「仁」の人として一貫して描くことを優先した。それは、毛宗崗本の文学としての完成度を高めるものと言えよう。こうして毛宗崗本は、一つの場面ごとの面白さの追究を優先する李卓吾本を抑えて、『演義』の通行本へと押し上げられたのである（第一章）。また、毛宗崗本は、「義」絶である関羽についての表現においても、「義」以外の属性を関羽から排除することに努めて、一貫性を保とうとした。李卓吾本では、「仁義」「忠義」とある関羽への評価について、「仁義」という言葉を削除し、「忠義」を「大義」に書き換えることによって、関羽が「義」絶であることを明確にしているのである（第二章）。

毛宗崗本の表現技法における第二の特徴は、「奸」絶の曹操、「義」絶の関羽、「智」絶の諸葛亮という「三絶」を物語の中核に据えることにある。李卓吾本は、物語に「三絶」という核がないため、所与の物語の場面に応じた評をその場限りで付けている。たとえば、諸葛亮の忠義を賛美しながら、ある場面では、口を極めて諸葛亮を非難する評を付けるのはそのためである。これに対して、毛宗崗本は、諸葛亮を「三絶」の中の「智」絶として表現するため、諸葛亮の行動に一貫性を持たせ、諸葛亮の無謬性を保つために物語を書き換える。そして、改変を「古本」三国志に基づいて校訂したという立場を取ることで、改変した文章に自らの評を付けることを可能にした。その評には、自らの改変の意図ばかりでなく、「三絶」に焦点を当てた読み方も記される。毛宗崗本は、物語を自らの理想の姿に書き換えることにより、「三絶」という主役の人物像を一貫して描き出す（第五章）。

毛宗崗本の表現技法における第三の特徴は、細部に至るまでの綿密な表現にある。蜀漢を正統とする『演義』が、関羽に代表される義を宣揚するとともに、漢への忠を中心として描く文学であることは言うまでもない。たとえば、諸葛亮の忠は、陳寿がその「出師表」を中心に置くように、『三國志』の主題でもあり、『演義』においても、十二分に強調されている。毛宗崗本は、そうした漢への忠や義の尊重を貂蟬など女性の表現にまで行き届かせていく。物語の細部まで主題が統一的に表現されていることが、文学としての完成度を示す指標の一つであるならば、毛宗崗本は、李卓吾本を代表とするそれまでの『演義』に比べて、完成度の高い文学作品と言えよう（第七章）。また、毛宗崗本は、劉禅を助けるために井戸に身を投げた糜夫人を皇后に追尊する虚構を加える一方で、甘夫人を劉備の嫡妻とするという虚構もそのまま踏襲した。劉禅が嫡長子であれば、嫡長子の相続は「長幼」により「賢愚」には依らない、と『春秋公羊傳』に明記してある。こうして劉禅を嫡長子とする虚構により、毛宗崗本は劉備と諸葛亮を守ると共に、蜀漢滅亡の必然性を説明することにも成功したのである（第九章）。

毛宗崗本の表現技法における第四の特徴は、社会通念の利用にある。曹操を異姓養子の子と批判しながらも、史実の劉備が異姓養子の劉封を収めていることについて、毛宗崗本は、李卓吾本よりも劉封を貶める表現を用いることで対応した。律で禁じられていた異姓養子を嗣として養子にした劉備が、異姓養子の死去を嘆く場面を削り、劉備の死後、劉禅のもとで独裁権を振るう諸葛亮が、劉封殺害を進言したことも削除する。こうした書き換えの背景にあったものは、異姓養子を取る慣行に対して、本来それは行うべきではない、とする明清時代の社会通念であった。毛宗崗本は、こうした社会通念を利用した表現技法により、異姓養子劉封の忠義を封印したのである（第三章）。また、毛宗崗本は、「奸」絶曹操の悪を描くために、曹操の香を分ける行為に伴う善行の対象を「妻」から「妾」に書き換えることで、曹操の善行を一層高めて描いた。それは、曹操の遺言に現れた、その「偽」なる性格を明確にする表現技法である。毛宗崗本は、篡奪の野望を胸に抱きながら口には出さず、最後までそれを隠すために、香を分ける善行を遺言する曹操の「偽」を描き出す。それにより、臨終の場面における曹操は、禅譲による篡奪という許し難い「大悪」を胸に秘めながら隠し続ける極悪人として表現された。そのため、人々が心から感心し、深い同情を寄せそうな香を分ける行為を付加し、妻を妾に改めることで、禅譲を目指す野望を隠して人を欺く、曹操のずる賢さを強調したのである（第四章）。また、『演義』の中で貂蟬は、嘉靖本より王允の家の歌伎という身分に設定され、李卓吾本・毛宗崗本もこれを継承する。しかし、三国の物語を語る雑劇や講唱文学の中には、貂蟬が関羽によって斬られる場面を持つものがあり、それらの作品ではすべて貂蟬の身分は呂布の妻となっている。毛宗崗本が評において、貂蟬が斬られる話を厳しく批判し、貂蟬の漢への義と王允への孝を功臣に準えて高く評価するのは、女性の貞節と親への孝・君への義との重さに関する社会通念を背景とする。中国近世では、女性の貞節が強く謳われたが、女性の貞節の期待は、その身分により程度に差があった。族譜の規定では、妻にかけられる貞節の期待は非常に大きく、妾のそれは妻よりも小さいものであった。そして、婢女や妓女、歌伎といった女性に対する貞節の期待は、さらに小さいものであった。しかも、親への孝は、妻であっても貞節に優先するものとされていた。貂蟬が、歌伎という身分で、漢への義と王允への孝のために董卓と呂布の二人と関係を持っても、不貞とされなかったのは、こうした中国近世における女性の貞節に対する社会通念を背景とするためなのである（第六章）。

このように、毛宗崗本は、第一に人物像を一貫させ、第二に「三絶」を物語の中核に据え、第三に細部に至るまでの綿密な表現を行うことで、文学としての完成度の高さを持っていた。さらに、第四に当該時代の社会通念を利用する表現技法を用いることで、千五百年の時空を超えて、三国時代の物語を「現代」の物語として読者に理解させた。こうした文学としての完成度の高さと受け入れやすさとが相俟って、毛宗崗本は『演義』のその他

の諸版本を抑え、通行本としての地位を築き上げたのである。

毛宗崗本が、文学としての完成度の高さのほかに、当該時代の社会通念を利用する表現によって通行本としての地位を得たことは、毛宗崗本に現れた社会通念を検討することで、当該時代の時代風潮を理解し得ることとなる。

毛宗崗本は、主人公である劉備を一貫して「仁」の人と表現した。それは、劉備を「仁」の人と描いて物語の中心に置き、聖人君子とすることで、対照的に描かれる「奸」絶曹操を際立たせると共に、「義」絶関羽・「智」絶諸葛亮の活躍を描くためであった。むろん、劉備・関羽・諸葛亮らを常に「善」、曹操を絶対的な「悪」と描く画一的な勧善懲悪の物語は、近代的な文学観からは批判もあろう。しかし、毛宗崗本が目指したものは、朱子学の「義」に基づいて、三国時代の歴史物語を分かり易く説明することにあつた。こうした特徴を持つことにより、朱子学に規定される中国近世において、一つの場面ごとの面白さの追究を優先する李卓吾本を抑えて、『三国志演義』の通行本へと押し上げられたのである（第一章）。

「三絶」の一人、関羽は「義」絶と表現されたが、「義」という儒教の徳目は、多義性を持つ。毛宗崗本は、多様な「義」の中から、関羽の「義」として「利他の義」を最も重視する。「義」は、「国家の支配理念としての義」、「共同性を示す義」、「個人間の信頼関係としての義」の三種に大別できる。そのうち、「国家の支配理念としての義」に含まれる「国家の正統性、正閏論の義」が、毛宗崗本をはじめとするすべての『演義』の主題である。とりわけ、毛宗崗本は、朱子の『資治通鑑綱目』の正閏論を継承することを「讀三國志法」に掲げており、「国家の正統性、正閏論の義」が、全体を貫く主題とされていた。それでも、毛宗崗本は、正統である蜀漢の最大の敵曹操を見逃す「義釋曹操」に描かれる、「利他の義」こそ関羽を代表する「義」であるとした。それは、関帝信仰において、関帝が自らを犠牲として人を救う「利他の義」を強く保持していたためである。毛宗崗本は、関帝の義を「利他の義」とする社会通念に関羽の表現を合わせることで、物語としての説得力を高めようとしたのである（第二章）。

毛宗崗本が最も力を込めて描く関羽の「義」は、同姓養子の関平を取り、異姓養子の劉封を批判する場面でも描かれる（第三章）。ただし、それらの関羽の「義」中でも、毛宗崗本の特徴となるものは、新たに加えられた「秉燭達旦」に見られる「男女の義」である。曹操が、劉備の二夫人との旅程で関羽を同室させることにより仕掛けた色欲の罠に、関羽は凜然として女性の貞節を守る「男女の義」で対抗する。「男女の義」の強調の背景には、明清時代における遠隔地商業の発展により、客商が旅先で女性とねんごろになることを戒めなければならない、という社会風潮があつた。『關聖帝君覺世眞經』に代表される関帝の善書は、悪行のはじめに淫を置き、姦淫を禁ずる神としての性格を強く打ち出している。また、関帝の占驗の中でも、関帝自身の口から淫行を禁ずべき話が語られ、人生の悪事の中で姦淫が最も犯しやすい罪であると戒められている。こうした関帝の教えは、客商の規範となっていた。毛宗崗本は「秉燭達旦」により、新たな読者層である遠隔地商業を行う客商たちに、関羽の「男女の義」という規範を示したのである（第八章）。

毛宗崗本は、諸葛亮を「智」絶として表現するため、諸葛亮の行動に一貫性を持たせ、諸葛亮の無謬性を保つために物語を書き換えた。そして、それを「古本」に基づいて校訂しただけである、との立場を取ることで、自らが改変した文章に自ら評を付けた。そのような毛宗崗本の評の中には、時として自らの書き換えを賛美するものも含まれる。毛宗崗本は、物語を自らの理想の姿に書き換えることにより、「三絶」という主役の人物像を一貫して描き出した。こうして『演義』は、「三絶」という物語の核を持つことになり、通行本として普及していったのである（第五章）。また、毛宗崗本は、「子以母貴、母以子貴」という「春秋の義」を淵源とし、中国近世の族譜や清律にも規定されていた母と子の関係についての社会通念を踏まえることで、劉禪・諸葛瞻といった蜀漢の子たちを母によ

って尊重する。その際、諸葛瞻は、李卓吾本では曖昧であった漢への「忠」を明確になるよう書き換えられている。諸葛瞻の「忠」を明確にすることで、「出師表」などに表現される諸葛亮の「忠」も一層引き立つのである（第九章）。

また、毛宗崗本は、「奸」絶曹操の悪を描くために、曹操の香を分ける行為に伴う善行の対象を「妻」から「妾」に書き換えることで、その「偽」なる性格を顕著に表現した（第四章）。また、李卓吾本では、漢への「忠」と同様に高い評価がされていた曹操への「忠」の価値を下げ、蜀漢を正統とするという物語の中軸をぶれることなく表現する。そして、徐母の「忠」を強調するあまり、徐庶の「孝」を結果として貶めている李卓吾本の表現を改めて、「忠」と「孝」の狭間に苦しむ徐庶の葛藤を救い出し、何のためらいもなく徐庶を送り出す劉備の「仁」に傷がつかない配慮をしている。このように毛宗崗本は、「三絶」と位置付ける曹操・関羽・諸葛亮の人物像を明確に描くとともに、漢を代表する劉備の「仁」をも明確に描くため、「忠」の表現を工夫しているのである（第七章）。

さらに、毛宗崗本は、王允の「連環の計」により董卓を打倒した貂蟬を高く評価する。毛宗崗本が、貂蟬を評価する第一の理由は、「連環の計」における貂蟬の行動を、育ての親である王允に対する「孝」の実践と捉えるためである。第二の理由は、貂蟬が漢に「義」を尽くしたためである。毛宗崗本の中には、貂蟬のほか曹皇后・孫夫人など漢への「義」を貫こうとする女性の表現が確認できる。毛宗崗本は、「義」を敷衍するという『演義』の物語世界を確立するため、女性像にも入念に手を加えたのである（第六章）

このように、毛宗崗本では、物語の主人公である劉備は「仁」、三絶のうち「義」絶の関羽は「義」、「智」絶の諸葛亮は「智」に基づく無謬性ほかに、子の諸葛瞻の「忠」を母の尊さによって表現した。また、「奸」絶の曹操は、その「偽」を愛情からの落差の中に表現した。これらの主要人物のほか、たとえば「忠」と「孝」の狭間に苦しむ徐庶の葛藤を救い出すと共に劉備の「仁」を確認し、貂蟬の「孝」と漢への「義」が貞節よりも優先されることなど女性たちの漢への「義」を描き出した。

「仁」・「義」・「智」・「孝」・「忠」といった規範は、すべて儒教、なかでも朱子学の倫理観に基づく。しかし、毛宗崗本に対して、封建道徳を肯定した、あるいは朱子学に基づく思想が見られる、と指摘することは、何も指摘していないに等しい。明清時代の知識人層が、科挙のために朱子学を学び、それを身体化していることは、毛綸・毛宗崗父子に限らず、当然のことだからである。

それを前提としたうえで、たとえば、女性が最優先すべきと考えられていた徳目である貞節が、親への「孝」や漢への「義」に比べると下位に置かれる貂蟬への表現や、『孝経』では、両立できると言われる「忠」と「孝」の狭間に苦しむ徐庶の表現など、朱子学に覆われた時代の中で生きる人々の具体的な行動規範が、当該時代の社会通念を背景に描かれている点にこそ、注目すべきである。そして、毛宗崗本の強調する関羽の「義」が、朱子学で最も尊重すべきとされ、『演義』そのものの存立の基盤にある国家の正統性の義よりも、「利他の義」という関帝信仰に基づく「義」であったように、朱子学だけで覆いきれない人々の信仰心の拠り所が、道教に置かれていたことも、確認されるべきである。そして、関羽の「義」の中で毛宗崗本から新たに追加されたものは、旅を場とする「男女の義」であった。そこからは、新たな読者層として遠隔地貿易の担い手に成長していた客商が想定される。

このように、毛宗崗本には、「仁」・「義」・「智」・「孝」・「忠」といった朱子学の規範を根底に置きながらも、その時代を生きた知識人層と商人の上層部が共感する時代風潮が表現されている。朱子学が社会に受容されていくときに生ずる柔軟な解釈や、朱子学だけでは埋まらない信仰などへの共感が、毛宗崗本を通行本へと押し上げたのである。

以上の内容を持つ仙石知子氏『毛宗崗批評『三国志演義』の研究』は、第一回 狩野直禎先生記念 三国志学会賞の授与に値するものである。